

# 「親鸞に学んだこと」 2

2015年8月15日  
NHKラジオ  
明日への言葉  
2015・7・23

文化大革命の大変が無ければ、私は本当の意味での親鸞との出会いはなかったかもしれません。

母は旧満州の時代、満州映画協会のタイピストとして7年間勤めましたが、日本人とかかわりがあったこと、日本語が話せることを必死で口にするにはなかつた。文化大革命後に、母は徐々に旧満州の時代の出来事、過酷な時代に日本人と育んだ友情などを話してくれました。それをきっかけに私は旧満州の歴史上の人物、事件について詳しく調べ始めました。人物、事件の多様な様相が現れてきて、それは今までの教科書、マスコミ、歴史記録と大きくずれています。

人類の歴史は各時代の勝者の都合によって添削されたものです。勝者が横行になり、敗者は卑賤になるという歴史観を踏襲してきた。勝者は善の場に於いて、敗者をいじめることによって、自分の良い姿勢を証明して欲望を満たします、其れに対して敗者は悔しさを抱えて復讐の真理を育んで行きます。一つの戦争が終わると、次の戦争の種をまく事になる、人類数千年来続けてきたこと。663年白村江の戦いから1945年日中戦争終了まで、戦いの歴史を繰り返してきた、1000年の間に5回戦い繰り返してきた。

「旧満州の真実 親鸞の視座から歴史を捉えなおす」という本を出版する事になりました。大きな時代の流れを見つめながら、父や母が体験したことなどを取りこんで組み立てた。その中で1923年関東大震災の時 無政府主義者大杉栄、伊藤野枝 甥7歳(橘宗一) 等を無残に殺害した人物甘粕正彦の満州での姿を母から聞いたままに描きました。親鸞の人間の悪としての、絶対平等性という親鸞の視座から彼の人生を捉えなおしました。

そこには深刻な存在の矛盾を抱えながら、人や国が泥沼にはまり込んでいった時代の中、懸命に誠実に生きようとした人間らしい姿が立ち現われてきたのです。親鸞に出会って親鸞に教えられた痛みがあります、この痛みは親鸞思想の核心だと思えます。親鸞は人間を、間を抱える存在として捉えます。

自我執着心→自分を中心にして自我拡大をしようとする心の働き。(欲望の満足を求める心の働き 財産、自分の勢力範囲を拡大しようとする働き)分別心→物事が 静と動、善と悪、正義と邪悪(黑白をつける) この二つは常に相関関係にあって、拡大してゆくように働く。

欲望の満足を求める人間は、自分の身を善の場におこうと欲望を正当化します。戦争は集団が欲望を求める行い、しかし、国のため、正義のためと、大義名文によって正当化される。正義感に煽られた欲望は歯止めが利かなくなり、おびただしい数の人間が人間によって殺されることになるが、人を殺したものに罪悪感がありません。

文化大革命の事を深く考えているうちに、このよう悩みを抱えている人間の心の奥底には、密かに育まれた隠ぺいな欲望、それは世の中に自分より劣った者を見出して、その存在を証明する喜びを求めることです。

自分より貧しい、能力のない人、不幸な人を見出すと一種の満足の喜びを感じるという心理、この欲望は食欲、金銭欲、権力欲等の様に形を取ったものではなく、欲望として意識されていないものの、実はいかなる欲望よりも深く求められ、最も人間心理に満足の喜びを与えるものなのです。

他者を見下すことによって優越感を証明する、これこそいじめやさびす？(よく聞きとれず)の真理の根源です。

暴力的ないじめは隠ぺいされた欲望を肉体に満たそうとする働きの表れですが、文化大革命の時代の残虐ないじめ行為の真理の根源でもあり、日中両国の間の溝の底に潜んでいる闇であると思います。

間を抱えた人間に親鸞が下した処方箋があります。

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞(ぐとくらん)、愛欲の広海に沈没(ちんもつ)し、名利の太山(たいせん)に 迷惑して定聚の数に入る事を喜ばず、真証の証に近づく事を快しまざる事を、恥ずべし、傷(いた)むべし、と。」

愚かな親鸞と読んでしまうが 愚は煩惱と間の同意義語 煩惱を抱える人間を意味すると考えられます。

罪深い人間の中の一人として、すべての存在の罪を一身に背負い、罪悪煩惱の奥の中にもがいている親鸞、すべての人間の姿です。

間を抱えた人間に親鸞が下した処方箋は「恥ずべし、傷(いた)むべし」

痛みを伴う罪への自覚は、仏教に於いての懺悔。

「人は世の世の中に生きていく限り、よく生きようとしても無意識的にも欲望の満足を求めたり、人の不幸を見て自分がそうならなくてよかったと思ったり、縁あって出会う人を傷つけたりするが、そういう存在の罪を鋭い痛みとして感じることは仏教の意味に於いての慚愧(心が刻まれるように心に切れ目を入れられるように、痛切な心に痛みを表す一文字です)

毛沢東思想の核心は階級闘争です、怒り、憎しみが増幅されて益々固く冷たくなる心が、親鸞の教えを味わっているうちに、逆の方向に育まれている事に実感しています。

言葉の意味を越える大切なものを教えて頂いた様な感じです。「教行信証」の中の言葉「煩惱の氷解けて、功德の水になる」

人間の心の変化を、氷が水に溶けている様に例えている。

いつか中国の人々に親鸞の思想を、深く理解していただきたいという気持ちです。

未来の道は共に存在の悲しみを抱え、繰り返して過ちを冒し続けてきた人間の罪を共有して痛む、人間の悪としての存在の絶対平等性というところに立脚して、共に慚愧してゆく、そこには人と人、国と国が繋がってゆく道が開かれるのではないかと思います。